



# 複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム

＜日本古代学教育・研究センター＞明治大学大学院文学研究科史学専攻・日本文学専攻

ニューズレター 第10号

## ◆挨拶

## 明治大学文学部教授・総括責任者 石川日出志



本プログラムは今年で4年目を迎え、文部科学省の支援を受けた「試運転」期間を終えて、2011年度からは明治大学単独の事業として「通常運行」に移行しました。プログラム総括責任者も、吉村武彦大学院長から石川にリレーしました。牽引力や統括力は比べるべくもないものの、意欲に違いはありません。就任にあたり、複眼的研究視野・能力について考えの一端を述べます。

私が専門とする考古学分野は、日常的に文理横断的思考が求められます。考古資料に対する伝統的な形態情報に関する研究だけでなく、理化学的な分析成果の理解が必須です。しかも、理化学的な成果を鵜呑みにするのではなく、

つねに批判的視点をもつことも要求されます。また、一般的に古い時代を対象とすると思われる考古学は、19世紀後半以後に学問的に確立されたので近現代のバイアスがかかっていることにも留意する必要があります。私は近現代の歴史学・文学・建築学等への目配りも必要だと考え、実践しているつもりです。

また、本プログラム始動直前の博士前期課程修了生の一人が秋田県男鹿市に埋蔵文化財担当者として勤めています。しかし、埋蔵文化財は日常業務の一部であり、戦前の地域新聞の復刻や第三紀・第四紀の地質学的資源の豊かさからジオパークとしての活用事業も担当しています。彼は、明治大学で近現代史や自然地理学を学んでいたからこそ男鹿の地史と地域史の総合ができる、と語っています。

大学院に進むと専門性が高まるために各専攻分野の掘り下げは勿論ですが、しかし専門性にはその後の展開・応用の基礎としての教養が伴わなければなりません。複眼的視野や教養とは、中・長期的スパンで必須の基礎体力づくりだと考えます。

### 目次：

国内フィールドワーク	
高麗大学校プログラム	2
文化継承学Ⅰ・Ⅱ合同公開授業	
「震災と文化継承学」	4
第1回高麗大学校・明治大学国際学術会議	
＜韓・日文化交流の諸相＞	6
特別公開講義紹介	
高麗大学校プログラム	8
プログラムの軌跡	8



2011年度 高麗大学校プログラム  
＜第5回高麗大学校・明治大学 学術交流行事＞より

## ◆フィールドワーク

### ◇高麗大学校プログラム

実施日：2011年9月5日（月）～9月8日（木）3泊4日  
 参加人数：学生8名、引率教員3名、合計11名  
 実施場所：韓国・ソウル市（高麗大学校）



＜高麗大学校プログラム・フィールド調査日程概要＞

- 9/5 東京（成田空港）より出発、ソウル（仁川空港）に到着、江華島支石墓見学
- 9/6 国立中央博物館見学  
第5回高麗大学校・明治大学 学術交流行事
- 9/7 水原華城・民俗村見学、明洞散策
- 9/8 景福宮見学、ソウル（仁川空港）より出発、東京（成田空港）に到着

### ◇参加記

博士後期課程3年 弦巻千晶

今年度の高麗大学校プログラムのフィールドワークは2011年9月5日（月）～8日（木）の日程で行われ、教員3名、学生8名の計11名が参加した。3泊4日という日程の中、高麗大学校との学術交流行事のほかに江華島支石墓、国立中央博物館、水原華城、民俗村、景福宮といった歴史的価値の高い場所を巡る、充実した内容の調査であった。私自身は韓国でのフィールドワーク参加は今回で2度目ということで、以前の経験を踏まえ、予め目的を持って参加できたため、限られた日程の中でも実りの多い調査を行うことができた。本参加記では、その中でも特に印象に残った江華支石墓の見学と学術交流行事の内容について記したい。

今回のフィールドワークの大きな成果として、韓国到着後すぐに訪れた江華島の支石墓の見学がある。不勉強なため支石墓という名称すら事前講義まで知らなかったが、調べてみると支石墓自体は中国遼東半島（遼寧省東部）から吉林省南部地域で出現したもので、朝鮮半島一帯に見られ、日本でも僅かに九州で簡略化されたものが現存している。まるで空に祀り上げるかのように板石を組んで高く持ち上



げ、テーブルのような形状をした支石墓は、遼東以南の地域で見られ、江華島で見られる支石墓はその最南端に位置している。江華島よりさらに南になると、碁盤状もしくは地上に板を置いただけのものになる。江華島の支石墓はこのように特徴的な形状を持つことに加え、現在我々が自由に見学可能な限られた資料のうちの一つである。この支石墓の歴史的価値や意味を真に理解するまでにはいたってないが、8月の事前講義後すぐに現地へ赴いた時、実際に目にした支石墓には心を揺さぶられた。学際的研究の重要性が問われる中、新たな分野に対して興味関心の幅を広めるとも貴重な経験が出来たと思う。

第5回となる高麗大学校・明治大学学術交流行事は、日程2日目の午後から行われた。今回の交流会では、高麗大学校の李亨大、沈慶昊両先生の特別講演の後、明治大学、高麗大学校各2名ずつの大学院生による研究発表、さらに総合討論が行われた。文学研究を軸とした興味深い研究成果が多数報告されたが、その中でも特に印象に残った韓国の古代詩・時調に関する李先生のご講演「辞説時調



と性的欲望の層位」の内容を振り返ってみたい。

時調とは、高麗時代末期（14世紀頃）に成立し朝鮮時代に全盛を極めた朝鮮固有の定型詩である。基本形態は3章6句から成り、3・4または4・4を基本として一定の規則的な音数律をもっている。これを平時調という。辞説時調というのは、平時調の句が2つ以上長くなったもので、平時調を短形時調と言うのに対して長形時調とも言う。初期の頃は両班階層の高官・文人・武将らが主な作り手となり平時調が作られたが、17世紀に入ると庶民層や妓女ら女流歌人の創作も盛んになり、それまでの形から形式的にも内容的にも外れた辞説時調が作られるようになった。

李先生のご講演では、そのような辞説時調に多く見られる性的欲望の表現の詳細な検討を通じて、詩的形式の中に投影された人間の根源的な欲望についてお話しいただいた。そもそも韓国では、欲望は抑制すべきものという儒教的価値観に沿った文学作品が作られ、時調もそれに即した形を成していた。しかし辞説時調は、人為的規律で節制され、平坦な美学を創造してきた伝統的な平時調を形式、言語、素材の面で大きく逸脱して作られており、殊に性をモチーフにし、人間の性的欲望を肉体的な言語で唱えるような辞説時調の作品は、当然世間では猥褻で文学的価値のないものとして否定的に評価されていた。しかし一方では、顔・胸・性器など身体の一部を直接的に挙げて人間の性的欲望を形象化しながら、封建社会の下に背負われた矛盾的な性の現実を描く辞説時調に対して、理念よりもっと根源的な部分で、享受者の生の共感が得られていたのである。このようにして辞説時調は、享受者の拡大とともに美的価値を獲得し、芸術空間の中で地位を築いていった。18世紀初頭に編まれた現存最古の歌集『青丘永言』（珍本）には、全作品の20%の辞説時調が含まれており、その編纂態度を記した序跋文にも、伝統的な平時調を規範としつつ辞説時調を新しい流れとして認知する姿勢が記されている。

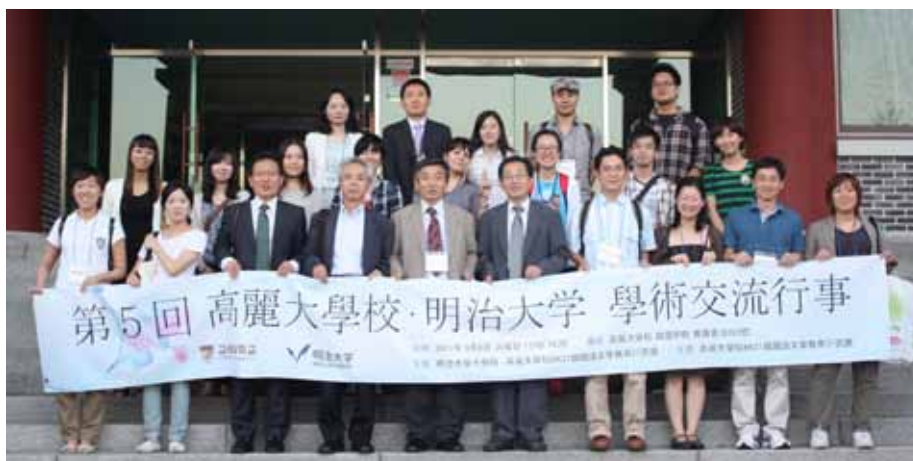
李先生のご講演を通じて、字面からだけでは決して読み



取ることができなかった韓国人の心、それは、封建的な理念や規律に抑圧されながらも、それらを大胆に突破していくエネルギーを内に秘めながら逞しく生きた当時の人々の息遣いを感じることができた。限られた言葉に心を託そうとする姿勢と、そこに託された心、どちらにも共感せずにはいられないのは、身分も社会も民族も関係ない、人間の根源の部分で共感できたからだと思う。

第1回目（2008年度）の韓国フィールドワーク、翌年明治大学で行われた第1回明治大学日韓文化研究シンポジウムなど、私にとってこの高麗大学校プログラムはとても思い出深いものであったが、自身の都合により初年度以来、参加を辞退してきた。その間、高麗大学校の学生と交流を持つ機会もなく、以前に交流のあった学生とも3年振りの再会であったが、空港での出迎えから自然体で歓迎を受け、相校の交流がこの4年間、脈々と続いてきたということを実感することができた。本プログラムでは、次世代を担う優秀な学生たちの継続的な交流を目的の一つとして掲げている。しかし、単に学術交流ではなく、学生たちが学問を通じて心の交流を深められているところに、更に大きな意味があると思う。今回のフィールドワークを通じて改めてその素晴らしさを感じることができた。明治大学も高麗大学校も今後、このプログラムへの新たな参加者が

増えて行くと思うが、皆に公平に与えられた機会を生かし、一人でも多くの学生が素晴らしい体験をし、生涯の友と出逢うことができれば良いと思う。当初、今年度も高麗大学校プログラムへの参加を見合わせるつもりでいたが、周囲の方々の御協力により今回のフィールドワークから参加させていただくことができた。文末であるが、ご尽力頂いた皆様に感謝申し上げたい。



## ◆文化継承学Ⅰ・Ⅱ合同公開授業「震災と文化継承」

日時：2011年7月15日（金）18：00～21：00

場所：リパティタワー 16階 1166教室

テーマ・講師：

「震災と歴史資料」矢田俊文（新潟大学人文学部教授・新潟大学災害・復興科学研究所危機管理・災害復興分野長）

「震災と考古学」矢島國雄（明治大学文学部教授）

「復興・再生・文化継承」石川日出志（明治大学文学部教授）

災害が発生した後、いかにして文化を復興するのかという問題が本シンポジウムの中心的な課題である。三者それぞれが専門的立場から発言し、震災発生前に取り組むべき課題などにも言及されていた。以下では矢田俊文氏、矢島國雄氏、石川日出志氏の発表内容をまとめつつ、「震災と文化継承」で提起された問題を振り返ってみたいと思う。

最初の発表は矢田俊文氏の「震災と歴史資料」である。新潟歴史資料救済ネットワークによる文化財レスキューの取り組みをスライドによって紹介し、救出・返還・復興の過程をたどりつつ、今後の防災に関する問題を明らかにする。

大きな災害が起こると、「命・生活と文化財のどちらが大事なのか」という議論が必ず起こる。緊急性の順番は当然、〈命・生活・文化〉の順であることは間違いない。しかし、文化を元に戻すためには「災害発生直後からその救出と復興に取り組まなければ上手くいかず、〈命・生活・文化〉の救済活動が同時に取り組まなければならない」というのが矢田氏の主張であった。

小千谷市の蔵や長岡市の山古志民俗資料館の文化財レスキュー活動を写真で紹介し、雨水による文化財被害や、また盗難などによる史・資料散逸の危険性が述べられた。ほかにも、文献史学と考古学的な津波堆積物の研究成果から、今後に予想される災害とその対策にも言及されている。紹介された写真は、いずれも被害の大きさを生々しく伝えるものであった。ただし、レスキューの過程で思いもよらない貴重資料が発見されることもあり、夏目漱石の書簡の発見と、その研究成果の紹介など、明るい話題も含まれていたのは印象深い。



阪神淡路大震災以降、様々な文化財保護・管理の対策が取られたが、それによって守られたものもあれば、守りきれなかったものもある。発表の最後には、今回の広域震災に触れ、「隣県がいかに被災地と協力するか」が述べられた。「直接の被災地ではない地域がどれだけサポートできるか」が重要であり、具体的には「物資や保管場所の提供」が挙げられている。人的・物的に壊滅状態に陥った陸前高田市立博物館の凄惨な現状や、福島放射能汚染に伴う今後の課題にも触れている。入場者・職員の命をどう守るのか、海沿いの施設の津波対策をどうするか、そして今後の発掘調査で放射能汚染された土壌をどう扱うかなどなど、問題は山積している。これらは理系・文系の枠を超えて取り組まなければならない課題であろう。

続く矢島國雄氏の「震災と考古学」では、博物館学の立場からいくつかの問題提起がなされた。話題の中心は「今後、博物館がどう変わっていかなければならないのか」であり、阪神淡路大震災以後に積み上げられてきた文化財保存のノウハウや、それを越えた今回の震災で浮上した問題が紹介された。

阪神淡路大震災前後から、発掘調査の過程で見つかる地震・火山災害といった自然災害の痕跡に関する具体的な報告がなされるようになり、その成果

は文化財保護の至るところで活かされている。阪神淡路以降の文化財被災をみると、展示ケースの中にあつた遺物の被害は大きいものの、きちんと保管された収蔵庫での被害は少ないという。ただし、今回の大震災で津波対策が取られていない現状が明らかとなり、海浜地域の博物館はその対策に取り組みねばならないとされる。また、復旧復興に関わる建設工事に伴い、遺跡調査が必要な地域が現れる。阪神淡路では考古学関係の調査員を阪神に集中させ対応したが、それでも三年の期間を必要とした。今回の震災は規模が大きく、十年スパンの取組が必要だろうという。資料の保管方法に関しては、従来通りで基本的には問題はないが、しかし、きちんと管理されていたにもかかわらず被害を受けた点などを点検し、改善していく必要がある。物的被害だけでなく、人的被害を防ぐための改善は、緊急の課題でもあろう。戦前・戦後まもなく作られた博物館は、耐震基準をクリアしていない施設もあり、資料管理の場所として今後どのように整理していくのかも課題として挙げられていた。



発表の後半では、東日本大震災後の具体的な活動も述べられた。これまでの災害経験の蓄積から、被災直後の資料救済プランの組み立て、関係学会の連係はスムーズに行われているという。ただし、今回のような想定外の大規模震災に対して、今後どのように対応すべきか。各地の文化財が盗難などによって荒らされている現状などに触れつつ、津波が入った場所に発生する問題は深刻であると指摘する。津波による浸食は、資料の劣化条件が新たに加わったことであり、従ってこれまで問題とされなかった新たな問題が浮上するだろう。また、放射能汚染の問題にも触れるが、最終的にどのように文化財をレスキューできるのか、また将来の発掘調査などにどのような問題が生じるのか、皆目検討のつかない問題が残されているという。

石川日出志氏の「復興・再生・文化継承」の中心テーマは、「地域の記憶をどうしたら失わずに復興活動ができるのか」であった。ネット上で公開されている杵形遺跡の発掘調査で明らかとなった津波災害などの紹介を足掛かりに、東日本大震災の復興に向けた議論が様々になされる中、かみ合わない議論の存在に注目する。それらを新聞記事によって紹介しつつ、「地域の記憶の継承がどのように可能なのか」という問題を追及していく。具体的には大船渡市の復興に向けた議論や住宅地の高台移転を例に挙げ、政策としての基本路線に伴う高台の開発や丘陵地の削平によって、生態系などの自然環境の破壊、生活環境の変化が懸念され、文化破壊の進行も覚悟する必要があるという。かつて津波の被害を受けた奥尻島では、住宅地を高台にと呼びかけたが六割が応じない現実があった。暮らしていた人々の生活習慣など、体に染みついた習慣を変える難しさがそこに現れている。そうした議論を拾いながら考古学に引き付けて考えようとする石川氏が問うのは、「文化財とは何なのか」である。文化財保護法を見ても、有形・無形を問わずその定義は広範囲に及ぶ。石川氏は今回の震災においても、「できる限りこの範囲を視界に入れた復興をすべきではないか」と述べつつ、しかし「そうした文化財保護は復興の壁なのか？」と問う。「命と文化財のどちらが大事かと言えば、命であることは間違いない。だが世代を超えた国民の宝である文化遺産を子孫に残すことも大切だ」という記事を紹介し、二者択一の問題とされがちな議論に疑問を呈し、両立していくような復興の方法を模索する必要性を主張する。

復興計画にハード面だけでなく、文化などのソフト面を含めなければならないという石川氏の主張を聞きつつ感じ



たことは、被災地から文化財保護の声が上がるような活動を、文化に携わる人々は常日ごろから意識していかなければならないということである。災害後に外部から文化財の重要性を訴えても、二者択一の構造はなかなか解消しない。内部から文化財保護の声が上がるような、情報の発信、地域との連携、意識の共有などを促す普段の活動が重要なのであろう。

(西野入篤男)

# ◆第1回高麗大学校・明治大学国際学術会議

## <韓・日文化交流の諸相>

日時：2011年3月28日（月）～31日（木）

場所：高麗大学校百周年記念館・仁村記念館

参加者：石川日出志（文学部教授）、日向一雅（文学部教授）、牧野淳司（文学部准教授）、小笠原好彦（大学院特任教授）、加藤友康（大学院特任教授）、中村大介（古代学研究所）、西野入篤男、五十嵐基善、鈴木裕之、梅原沙也佳、佐野愛子（※吉村大学院長は、震災後の対応のため同行せず、五十嵐基善氏の代読および誌上参加となった。）

2011年3月29日・30日に韓国高麗大学校で開催された国際学術会議<韓・日文化交流の諸相>に参加した。これまで高麗大学校との交流は文学を中心に行っていたが、今回は史学・考古学を含めて開催され、従来よりも規模の大きな会議となった。

初日は高麗大学校百周年記念館で文学・史学・考古学の全てが一堂に会し、教授陣を中心に日韓文化の差異や古代の国際意識といった大きなテーマで議論が交わされた。2日目は<文学>部門、<史学・考古学>部門で会場を分け、院生発表と院生同士の討論を中心に進行するスタイルであった。文学専門の私は第一会議室で行われた<文学>部門の会議に参加した。9時半から17時半の間に教授3名と院生6名の発表が行われたが、それぞれの題目は「プログラム」を参照していただきたい。以下では、いくつかの発表を取り上げつつ、全体的な感想を記すこととする。

この会議に参加して何より感じたことは、テーマ設定の難しさである。各国の研究者が集まる国際会議の場では、それぞれが問題意識を共有できるか否かが重要なポイントとなろう。教授3名の発表はいずれも、何らかの形で日韓両国で交差する問題の提示を試みている。例えば沈慶昊氏「朝鮮における三韻中心の韻書と日本の三重韻本」では『三韻通考』の三韻構成が、日本の三重韻と類似する点に着目し、その影響関係を実証的に明らかにし、牧野淳司氏『『平家物語』の国際意識』は、『平家物語』の成立を考察するにあたり、12世紀後半以降、東大寺を含む密教文化圏が朝鮮半島や大陸とどのように繋がっていたかを究明する必要性に触れている。鄭雨峰氏「朝鮮後期の國文日記文學の時間構造—平安時代の日記文學との比較を兼ねて—」は、『丙子日記』と『土佐日記』、『薪島日録』と『蜻蛉日記』の時間意識の類似と差異の分析によって、日記を書く目的によって変化する時間意識を明らかにし、日本史学の研究者から、仮名日記のみではなく、男性の漢文日記の時間意識とどのように関わるかという疑問を引き出している。

それらに対して、院生発表は少々視野が狭いように感じた。各々の専門を深く掘り下げた興味深い発表であったが、更に隣接諸学や海外を意識した視座を設けて欲しい。

私の発表は「海外における『源氏物語』から」と題し、韓国語訳による『源氏物語』受容の実態をまとめることを通じて浮上する問題が、日本国内における歴史的な『源氏物語』受容の変遷と交差し、特に中世・近世の俗語訳・梗概書による受容や、絵画・翻案作品による作品享受の問題と重なることを指摘するものである。中国における伝播の実態を併せて紹介することにより、日中韓で共通して取り組むことができる問題を探る試みでもあった。質疑では「漫画、映画といった原文よりも享受しやすいもので理解することをどう思うか」との質問を受け、服装や建築様式などの理解には優れているが、それがどれほど歴史的事実を再現しているかを常に注意すべきであることを述べた。海外での発表を意識してテーマを選択したが、結局、概説的な論に終始してしまった。今後はより多くの史・資料を取り込みつつ、専門性を高めることが課題である。

日韓両国で重要なテーマを扱った発表として印象に残っているのが、崔恩榮氏の「金達壽『太白山脈』における解放の意味—アイデンティティ問題を中心に—」である。崔氏は在日朝鮮人という境界を生きる人々の葛藤を、作中人物の分析を通して浮き上がらせていく。作中人物は<解放後も日本に対する依存心と模倣欲求が残る人物>と<自己の劣等意識が日本によって作られた虚構であることを自覚する人物>とに分けられ、特に後者は「肯定的なアイデンティティ」発見を通して、「新たな抵抗の可能性」を模索するという。朝鮮人、日本人それぞれに存する差別意識を見つめる作品の紹介・分析は、現代社会に根強く残る問題を再認識させるものであり、このような国際会議の場で今後も議論され続けるべきことだと思われた。

大学院生にとって、海外での研究発表は極めて貴重な体験であり、自己の研究テーマを広い視野から位置づけ直す機会でもある。日本古代学教育・研究センターが進める本プログラムは、細分化・専門化が進んだ現在の研究状況を乗り越えるためのものであり、今後も続く海外との研究交流では、是非、視野を広げた研究発表に挑戦していただきたいと思う。

（西野入篤男）

**発表タイトル** (明治大学より 11 名発表)

- 吉村 武彦 「5・6世紀における半島・列島間交流」
- 石川日出志 「日本列島と韓半島青銅器文化の異同」
- 日向 一雅 「『源氏物語』の国際意識」
- 牧野 淳司 「『平家物語』の国際意識」
- 小笠原好彦 「百済・新羅と日本の寺院」
- 加藤 友康 「平安貴族の国際意識」
- 西野入篤男 「海外における『源氏物語』から」
- 五十嵐基善 「日本の律令制と『令集解』」
- 鈴木 裕之 「日本古代の中央軍事制度に関する考察—日本古代衛府制度の画期について」
- 梅原沙也佳 「血盆経信仰と如意輪観音」
- 佐野 愛子 「『風土記』における荒ぶる神について」



**◆参加記**

博士後期課程 3年 五十嵐基善

第1回高麗大学校・明治大学国際学術会議の2日目は、A会場では文学中心の9報告、B会場では考古学・歴史学中心の8報告が行なわれた。私はB会場に参加し、「日本の律令制と『令集解』」というタイトルで報告を行なった。以下、参加して感じたことを記していきたい。

私の報告は、中国で出現した政治体制である律令制について、日本がどのように受容していったのかを扱ったものである。日本の律令制を考える時に、律令注釈書が作成されたことが特徴の一つとして挙げられる。その背景として、日本の律令制が中国と同じ体系的な律令により構築されたこと、諸制度が律令によって運用されることなどを指摘した。また、日本古代史で重要な典籍であり、吉村武彦ゼミでも講読している『令集解』(令注釈書を集成した典籍)を史料紹介も兼ねて大きく取り上げた。韓国での認知度は必ずしも高くはないと思われる『令集解』ではあるが、私の拙い報告により少しでも理解していただけたのであれば幸いである。

また、新羅の律令制について、日本とは異なり律令を単行法令として受容していたことにも言及した。コメントを

してくださった辛善恵氏(高麗大学校大学院)からは、新羅の歴史と律令制受容の関係に関する質問をいただいた。当然のことではあるが、朝鮮半島の歴史的展開を十分にふまえることの重要性を再認識した。近年、日本では「一国史」をいかにして乗り越えていくのかという問題が提起されてきている。律令制の受容をめぐるのは、中国・朝鮮半島諸国・日本という地域的連関を考えなくてはならず、各地域における特徴を正しく理解する必要がある。さらに、日本の歴史は周辺諸地域の影響を大きく受けていたことは言うまでもないのであるが、いわゆる「日本史」の枠組を実体験として考える機会を得たことは非常に大きかった。

私以外の報告について、B会場では大学院生による5報告(明治大学大学院の鈴木裕之氏による報告を含む)があった。高麗大学校の大学院生による報告は、「日本史」の枠組でいうと中世史と現代史に該当するものであった。私は古代史を研究しているので十分な知識を持っていなかったが、いずれの報告も日本との関係のあるものであり考えさせられる点が多かった。特に、私がコメントさせていただいた芮大烈氏(高麗大学校博士課程生)の報告は、日本の植民地支配に関わる重要な内容も含んでいた。古代史だけに目を向けているのではなく、視野を広げる必要性を強く感じた。

韓国を訪れたのは、これまでに実施された慶北大学校プログラムの2回と今回で3度目であった。これからの研究には朝鮮半島の歴史はもちろん、韓国の研究者との連携は必要であろう。私自身としては、これまで意識していた「日本史」という枠組をいかにして消化していくべきかという収穫と課題を得た。今回は、海外で報告をさせていただいただけではなく、多くの方々と交流ができたことは非常に有意義であった。



## ◆特別公開講義紹介

### ◇高麗大学校プログラム

日 時：2011年7月30日（土）

講 師：日本大学文理学部准教授 山本 孝文

場 所：リバティタワー 14階 1145教室

テーマ：「夢村土城・風納土城・石村洞古墳群  
ーソウル市内の百濟時代遺跡ー」



ソウル市内に所在する、百濟時代漢城期（紀元前後～475年）の夢村土城・風納土城・石村洞古墳群に関する近年の調査・研究の成果と課題について解説された。これらソウル市内の遺跡群は、①都城や首長級古墳の出現は、百濟の国家形成を考える鍵となる、②漢江北岸の高句麗遺跡

の存在と、江南における高句麗系遺物は、漢城陥落（475年）と関連する、③横穴式石室が百濟と新羅のいずれに帰属するか議論がある、など半島における古代国家および国家間の相互関係を考える上で重要である、とされた。

その上で各遺跡の調査・研究についてスライドを用いて詳しく解説された。石村洞古墳群は、かつて存在した90基のうち5基のみが現存し、土坑木棺墓→葺石封土墳→割石積方形基壇式積石塚墳の順に出現して熊津遷都時に終焉を迎える。21.6haもの規模の夢村土城は、自然丘陵を利用して築かれ、城壁には木柵や望楼が併設され、城内には各種建物・施設が確認できる。風納土城は漢江沿いの平地に築かれており、土城に先行する三条の直線環濠が検出され、築造開始期について論争がある。城内は道路で北・中・南区に分割され、宮殿&宗廟区・公共施設区・居住区とみる意見がある。

両土城は最有力土城だが、周辺の土城も念頭においた検討も必要と述べられた。

（石川 日出志）

## ◆2011年度プログラム（前期）の軌跡

2011/4/ 27	運営委員会
2011/4/ 27	新入生ガイダンス
2011/6/10	12号館4階9階から猿楽町第二校舎3階に移転
2011/6/16	北京大学来訪・打合せ
2011/7/1	運営委員会
2011/7/15	文化継承学Ⅰ・Ⅱ合同公開授業「震災と文化継承」
2011/7/30	山本孝文（日本大学文理学部准教授）による特別公開講義「夢村土城・風納土城・石村洞古墳群ーソウル市内の百濟時代遺跡ー」
2011/8/31	高麗大学校プログラム・中国プログラム事前ガイダンス
2011/9/5～8	高麗大学校プログラム（3泊4日）
2011/9/20～25	中国プログラム（5泊6日）

明治大学 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

日本古代学教育・研究センター：猿楽町第二校舎3階 TEL・FAX：03-3296-4492

Eメール jkodaken@kisc.meiji.ac.jp ホームページ <http://www.kisc.meiji.ac.jp/~jkodaken/>

教務事務部大学院事務室：リバティタワー19階 TEL：03-3296-4142 FAX：03-3296-4352